



特集 県無形文化財指定 西の内紙

紙の原料「^{こうぞ}楮」の生産に適した 市の気候

西の内紙は楮という植物を原料として作ります。茨城県北西部（常陸大宮市、大子町）は楮が好む寒暖差のある気候で、紙作りに適した質の楮が育ちやすい地域です。江戸時代、県北西部で育った楮は、栃木県を流れる鬼怒川を使って、江戸まで運ばれていたことから、「那須楮」と呼ばれ、県外にも広く流通していました。現在でも、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている岐阜県の本美濃紙^{ほんみのし}や、人間国宝がすぐ越前和紙の原料としても使われています。

江戸での紙需要から水戸藩随一の 商品となった西の内紙

紙づくりは、奈良時代から行われていましたが、最も盛んに紙作りが行われるようになったのは、江戸時代になってからです。江戸の発展に伴い、紙の需要が莫大に増加したことで、品質の高い原料と紙すきの技術がそろった茨城県北部では、紙の増産を迫られました。生産・流通量が増加したことで、水戸藩でも随一の商品となり、農家が作物の取れない冬の時期の仕事として行っていました。

卒業証書や県民手帳にも使われている 西の内紙

西の内紙は、市内小中学校・県内高校の卒業証書にも使われています。一部学校では、自分の卒業証書を自分の手ですく体験も行っています。また、茨城県民手帳の表紙としても使われており、毎年、茨城県を象徴する花などをテーマに、紙すき職人がデザイン考案から携わっています。他にも、御朱印帳^{はりせん}や着物の帯を作成するための糸、講師師が使う張扇^{はりせん}などにも使われ、県外からも需要がある西の内紙は、常陸大宮市が誇る特産品になっています。



▲西の内紙の卒業証書。校章を印刷した紙を2枚の西の内紙で挟み込んで作ります。

濡れても乾かせばまた使える丈夫な紙

西の内紙の最大の特徴は「丈夫さ」です。その丈夫さを象徴する江戸時代の商人のエピソードがあります。江戸時代、商人は販売の情報を「大福帳」という帳簿に記録し、年に1回、まとめて料金を払うシステムを取っており、客ごとに大福帳が作られていました。火事が多かったこの時代、炎から大切な顧客情報を守るため、井戸に大福帳を投げ込み、火事が収まった後に回収し、大福帳を乾かしていたそうです。西の内紙の大福帳は、濡れても乾かすと、井戸に入れる前と同じように、また1ページずつめくれることから、商人に愛用されていました。

それ以外にも、身分に関わらず、さまざまな用途で西の内紙が使われました。幕府や大名間の通達などに特に質の良い西の内紙が使われ、庶民の間では、布よりも紙の方が手に入りやすいこと、楮の節などの固い部分が混ざった書くことは不向きな紙でも十分な強度があることから、傘や作業服を作る際にも使われました。



◀江戸時代に使われていた「大福帳」（紙のさと蔵）。250年以上の歳月が経った今でも、良い状態で残っており、西の内紙の品質の高さが伺えます。

西の内紙ができるまで

1 1年かけて成長した楮 を収穫（2月ごろ）



市内の生産農家では2月ごろ収穫を行います。収穫した切り株からは、また新しい楮が成長し、1年で収穫できるようになります。

2 楮を煮て、「白皮」のみ の状態に加工



楮は一度蒸して、水で冷やしたあと、一番外側の黒皮、一番内側の芯を取り除いて、和紙の原料になる白皮のみの状態にし、乾燥して保存しておきます。

3 白皮をソーダ灰で煮て、 繊維結合を緩くする



白皮をソーダ灰を入れた熱湯で煮ます。ソーダ灰でアルカリ性にすることで、繊維結合を緩くさせ、紙すき作業を行いやすくします。

4 固い繊維など取り除き、 繊維を叩く



紙の品質に影響を及ぼす節や固い繊維などを手作業で取り除き、その後、機械で繊維を叩いて柔らかくします。

5 水、粘剤と混ぜて、 1枚ずつ紙をすく



楮に水と粘剤と混ぜ、紙をすいていきます。粘剤には小美玉市などで生産されるトロロアオイという植物を使います。

6 金属板の乾燥用機械に 貼り付ける



金属板の乾燥用機械に紙を貼り付け、熱して乾燥します。板に張り付いていた側が紙の表側になります。



五介和紙 菊池 浩さん

山方地区に店を構える「五介和紙」。その4代目を務めるのが、菊池浩さんです。紙すきは浩さんを含め2人で担当し、乾燥作業担当1人と合わせて3人で、西の内紙づくりを行っています。

伝統をつなぐため 父のもとで修行を重ねる

浩さんは、高校卒業後、五介和紙の3代目である、父に弟子入りしました。「家族代々、和紙作りを家業としていたので、自分が4代目として継ぐことは自然な流れでした」と浩さん。父のもとで修行を重ね、販売できる品質の西の内紙を安定して作れるようになるまで10年かかったといいます。「特



1 楮と水、粘剤のトロロアオイを混ぜる様子。均一に混ぜるよう、馬鋤を激しく前後に揺らします。この作業での材料の混ざり具合で、この後行う紙すきの作業の質が変わってくるといいます。2 乾燥は浩さんの叔母である正子さんが担当しています。3 和紙売り場の隣には、和紙を買いにきたお客にそばを振る舞っていた過去がきっかけで始めたそば店があります。



に、紙の厚みを目や重さでわかるようになるまで時間がかかりました。紙を1枚1枚すく度に、父に確認してもらいながら、感覚を身につけていきました」と話します。

「均一な粘度」が 紙すきのポイント

紙作りの工程の中でも、特に重要なのは、原料の粘度だと浩さんは言います。粘度が高いと、厚みの調整が難しく、逆に粘度が低いと、その後、脱水や乾燥の工程を行うタイミングで、1枚ずつはが

れにくくなってしまいます。紙すきに適した原料の粘度調整も、長年の経験から身につけた職人の技です。

「未来に技術を繋ぎたい」

浩さんは、この先やりたいこととして、西の内紙づくりの技術の伝承を挙げ、「もし、技術を継いでいきたいという方がいたら、教えたいと思っています」と、今後も代々続いてきた技術を未来へとつないでいきたい思いを話してくれました。



紙のさと 菊池 大輔さん

舟生地区にある「紙のさと」の店主の菊池大輔さん。岐阜県から移住した曾祖父がはじめた紙すきは大輔さんで4代目で、現在は、大輔さんご夫婦2人で紙作りを行っています。

楮の収穫、加工、 紙すきと多忙な冬季

紙のさとでは、自分たちで育てた楮を使い、商品を作っています。楮の収穫を2月に行い、4月までは、昼間の紙すき作業後、白皮にする作業を行うといいます。

また、粘剤に適した水の温度になる冬にしか作ることのできない紙もあり、冬場は紙すき職人の繁忙期になるといいます。



1 商品によって紙すきの水の流し方が変わると大輔さん。写真では、簀笥から縦に水が流れて出ていることがわかります。2 楮の節や固い繊維などを取り除く「ちりとり」の作業は妻が担当。取り除いたものは固い部分が入っていても品質に影響がない商品に再利用します。3 取材中、糸に加工する和紙を仕入れに来客がありました。2mmほどに切って糸に加工したあとは、着物の帯などに使用するとのことです。



依頼者の要望に合わせて 試行錯誤を重ねる

手ですく和紙は、数量や厚みなどの要望に細かく応えられるのが特徴の1つで、全国から、多種多様な注文が入るといいます。糸に加工するための和紙作りでは、糸を紡ぎやすいよう、繊維が縦に並ぶように紙をすきます。また、「茨城県民手帳」のカバーになる西の内紙のデザインも毎年、発行元と相談して、試行錯誤を重ねています。「令和7年の手帳は、コキア

のイメージと要望があり、色と、かすかな凹凸でコキアを表現しました」と話してくれました。

「自分の商品を良いと思っ てくれる人を大切に」

今後も、依頼者の要望に合わせて、試行錯誤を重ねながら、お互いに良いと思える紙を作っていくという大輔さん。「自分のすいた紙を気に入っている人や、大切にしてくれる人に寄り添いたい」と依頼者への真摯な気持ちを話してくれました。

五介和紙

住所：常陸大宮市山方1323 電話：0295-57-6647

営業時間：9:00~17:00

定休日：月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）

五介和紙では、商品販売のほか、西の内版（33cm × 48cm）の大きさの和紙を作る体験もできます。



紙のさと

住所 常陸大宮市舟生90 電話 0295-57-2252

営業時間 9:00~17:30

定休日 水・木曜日（祝日の場合は営業）、年末年始

紙のさとでは、商品販売のほか、色をつけた繊維を和紙の上に乘せて絵を作る「すき絵」の体験ができます。

